

書評

P・ドランジエ著（高橋理監訳）

『ハンザ一二―一七世紀』

（みすず書房、二〇一六年）

菊池 雄太

「日本ハンザ史研究会」が二〇〇三年以来取り組んできた、ハンザ史概説書のスタンダードとして名高いP・ドランジエ *Ja Hanse* の邦訳が、一四年近い歳月を経て結実した。独語訳はすでに六版を重ね、専門家の間では著者の名「ドランジエ」が本書を指すほどに慣れ親しまれ、今もって引用され続けるハンザ史研究の古典中の古典である。中世ドイツ史、北欧史、東欧史研究における必読の書に邦語でアクセスできるようになったことを、まずは慶びたい。仏語原著の初版刊行は一九六四年、本書の底本は一九八八年刊行の改定版である。初版からは五〇年以上、改訂版からは三〇年経つ概説書の邦訳は、現在の研究水準においてどのように位置づけられるか。以下では、各章の細かな内

容には逐一立ち入らずに本書の概要と大まかな特徴を提示したのち、いくつかの個別論点から「今日におけるドランジエ」を検討し、上述の問題に対する私見を提示することで、評者の責めを塞ぎたい。

本書は、序論、第一部「商人ハンザから都市ハンザへ一二―一四世紀」、第二部「一四、一五世紀のハンザ」、第三部「危機と衰退一五―一七世紀」、結論、という三部構成の中で、ハンザの全体像を叙述している。本書が他の概説書と一線を画し、古典として読み継がれている理由のひとつは、その優れた構成力であろう。以下で詳述するが、本書は第一部でハンザの形成と発展、第三部でハンザの衰退を扱うことで通史的な流れをおさえつつも、事件史的・編年史的な叙述に終始せず、間の第二部では、ハンザの構造をとりわけ経済的な側面から描くことに十分な紙幅を割いている。このことにより、政治・外交的展開と社会・経済的構造とが見事にかみ合った概説となっている。

序論では、ハンザがいかなる歴史的存在であったのかが、平易かつ明確に論じられる。冒頭で述べられている、「ドイツ・ハンザは、もともとは北ドイツの商人集団だったものが一四世紀半ばに都市の連合体へと変貌した、すぐれて中世的な所産である」（九頁、傍点評者）という一文に、著者のハンザのとらえ方が集約されている。すなわちハン

ザはその初期形態において、遠隔地交易に従事するドイツ商人が、商旅や取引地での危険から身を守りつつ自らの權益を確保するために形成した人的結合体であった。それが商人の定住化と都市の発展とともに、北海・バルト海地方を中心とした地域の諸都市が結びつき、広域商業勢力を結成した。

第I部では、その過程が時代を追って活写される。一二世紀以降、北方交易が活発化する中でドイツ商人のバルト海地方への進出が本格化し、さらに同世紀中頃に建設されたりユーベックを足掛かりとしてバルト海地方におけるドイツ都市の建設が展開していく。これらの諸都市は相互に緊密に結びついていた。こうして、ドイツ商人の人的集団である「商人ハンザ」から、都市の連合体である「都市ハンザへの道」(第I部第三章)が切り拓かれていく。そして、ハンザ勢力が勢を増す中でフランドルやデンマークとの紛争が生じた際、多くの諸都市が連携して経済封鎖や軍事行動といった大規模な外交的・軍事的行動を起こすに至り、さらにそれが成功を取めたことで、「都市ハンザ」が確立したのである。この「商人ハンザから都市ハンザへ」という明瞭な時代区分は、ドラランジェのハンザ史観の特徴のひとつである。

第II部では、「ハンザの組織」、「都市」、「船舶、航海、

船主」、「商人」、「ハンザの経済政策」、「ハンザの商業」、「ハンザの文明」といった項目が章ごとに扱われている。一四、一五世紀の、すなわち「都市ハンザ」が形成・確立しハンザが最盛期を迎えた時期の、ハンザの制度的・社会的・経済的・文化的側面が体系的かつ詳細に描かれる。評者の認識では本書の白眉たる部分である。本書を構成する三部のうちで最大の分量が、ハンザの構造部位に関する叙述に割かれているのであり、類書にはない特徴と言える。アナル学派の盛期に活躍したフランス人中世史家である著者ならではの特徴が発揮されており、それはドイツ人によるハンザ史概説書、たとえばH・シュトープの著作(H. Stob, *Die Hanse, Graz et al. 1995*)と比較すればより明瞭になる。すなわち当該書は全体が事件史的・編年史的な章構成をとり、上述のような項目は各所に挿入されるという形で扱われているのである。ところで本書の監訳者高橋理の「あとがき」によれば、ドラランジェは「アナル学派の影響をそれほどには受けていない」(四三二頁)。しかし、評者の感覚としては、F・ブローデルの『地中海』を彷彿とさせるようなアナル学派的構造史の特徴を、本書からある程度は見て取ることが可能なように思われる。

一五世紀以降にハンザが直面した危機と、ハンザの最終的な衰退が、第III部のテーマである。前世紀にすでに兆候

的に見られた、ハンザの商業覇権を揺るがす内外の諸要因が、この世紀から段階的に明白になっていく。第一に挙げられるのが、「君主権の確立」であり、これに伴い「君主たちは以前よりも自国の商人を優遇する傾向を見せ」たため、「政治権力の後ろ盾を全く持たないハンザ」は取引停止や商館移転等の伝統的な経済的対抗措置をとるが、これは「広大で集権的な国家には効果を欠いた」（二九七頁）。それ以上に深刻であったのは、南ドイツ商人やイングラド商人、とりわけオランダ商人が競争相手として台頭し、北海・バルト海商業圏におけるハンザ商人の影響力が削がれていったことである。敵対的な君主や非ハンザ商人に対して一部のハンザ成員都市は対抗的・抑圧的な政策で臨もうとするが、それに積極的に協力しない都市も多かった。各地の君主権力が独自の経済政策を強力に推進したこと、またハンザに競合する商人をめぐる利害が地域によって異なっていたことにより、ハンザ成員諸都市が政治経済上の政策立場を共有することがもはやできなくなったためである。成員間の不一致が解消されない以上、競争勢力に対する経済封鎖の効果も望めず、ハンザは瓦解し、一七世紀に消滅するに至る。ただし著者は、成員都市や商人の利害を代表する組織勢力としてのハンザの衰退を明示する一方で、ハンザ成員諸都市の商業が同時期に未曾有の繁栄を経

験した点を強調する。ハンザは政治・外交的に弱体化した反面、経済的にはその限りではないとする視点である。この見方は今日では広く認められているが、当時ではまだ萌芽的な個別の研究成果を反映したものであった。

結論では、ハンザの興隆と衰微が考察される。五〇〇年の長きにわたり存在感を示したハンザの強さは何であり、また、中世という時代の幕引きとともに消滅せざるを得なかった弱さは何であったのか。個々の論点をこの場で紹介することはできないが、著者によれば、「一七世紀におけるハンザの消滅に驚くくらいならむしろ、ハンザが長く続いたことに驚嘆すべき」（二八三頁）であり、それは「ヨーロッパがハンザを必要としたという事実のおかげでもあった」（三八四頁）。これは裏を返せば、ハンザの経済的商業的機能が必ずしも必要とされず、時代に適合的でなくなつたとき、ハンザはその歴史的役割を終えたということであろう。

結論に続いて、一九六〇年から一九八五年までのハンザ史研究動向の概観が付され、さらに訳者の一人である柏倉知秀が一九八六年から本書刊行時点までの時期について補完することで、読者の便宜が図られている。

さて、上述したように、本書の仏語初版は一九六四年、改訂版は一九八八年の刊行であり、概説書としてはいさ

さか古い。当然、今日の研究水準に照らした場合、もはや妥当とは言えない記述内容も多い。この問題について、独語訳では二〇一二年刊行の最新第六版 *Die Hanse. Neu bearbeitet von Volker Henn und Nils Jörn* で大胆な処理がなされた。原著の内容そのものに変更を加えたのである。ただし、どの部分がどのように変えられたのかがまったく示されていないので、不完全かつ問題の多い改訂である。とはいえこれは、「ドランジエ」が今日でも引用すべき名著であると同時に、内容にはある程度の更新がどうしても必要となってきたことの証左であろう。さらにこのような更新は、軽微なもののみではなく、ハンザの本質・根幹に関わる内容を含む。この問題について、以下でやや具体的に論じたい。

上段で、「ドランジエ」の魅力のひとつが優れた構成員にあることを述べた。それは、部・章の組み立てといった技術的な巧みさにとどまるものではない。第一部では、「商人ハンザから都市ハンザへ」という時代区分を設けてハンザの形成と展開を跡付けることで、ハンザ史の全体像を分かりやすい図式で提示することに成功した。このようなハンザ通史の把握は広範に受容され、たとえば日本でも高橋理の概説書『ハンザ「同盟」の歴史』創文社、二〇一三年で、「商人ハンザの時代」と「都市ハンザの確立」といっ

た章立てが採用されている。ところが、近年のハンザ史学界では、「商人ハンザ」や「都市ハンザ」といった用語は必ずしも適当ではないとみなされている。たとえば独語訳最新版では、第一部のタイトルは、「商人ハンザから都市ハンザへ」を「初期段階 *Die Anfänge*」に、第一部第三章「都市ハンザへの道」は「ドイツ・ハンザへの道 *Auf dem Weg zur deutschen hanse*」第二章「都市ハンザ―北ヨーロッパの大勢力」は「勢力のもつとも強かった頃のハンザ *Die Hanse auf dem Höhepunkt ihrer Geltung*」に変更されている。つまり、「商人ハンザ」や「都市ハンザ」といった特定の意味内容をもつ学術用語(造語)を使うかわりに、より客観的な状態や時期を表す表現か、ドイツ・ハンザのような史料語を用いているのである。

このような変更の背景には、研究史上のどのような動きがあるのだろうか。評者が注目したのは、独語訳最新版で差し替えられた、本書結論部で「都市ハンザ」について述べられた部分である。ドイツ諸都市が「連合して都市ハンザを形成」し、「都市ハンザが商人ハンザに取って代わった」(三八四頁) ことに関する記述部分が、独語訳では削除されている。それにかえて、バルト海地方へ都市定住地が拡大することによって商人の親類ネットワークが拡大し共同体内で人的紐帯が形成されたことを指摘した上で、近

年注目されているハンザ商人ネットワーク研究に言及している。今日の研究では、都市の役割が強化される中でハンザが制度的に整えられてきた時代（それはたとえば外地商館に対する都市の優位等に表され、この点については独語訳最新版でも変更はない）においても、人的紐帯がハンザという共同体の基本構成要素であったことが確認されている。「商人ハンザから都市ハンザへ」移行するという枠組みでは、この点が見落とされるのである。

このことと関連してドランジエは、特定都市間で結ばれた都市同盟がハンザの発展に果たした役割を、過度に強調している。とくにリュエベックに別格の重要性を付与し、それと密接な関係をもったヴェント諸都市との同盟関係、いわゆる「ヴェント都市同盟」が「ハンザ史にとってより重要な意味」（五八頁）をもち、ハンザは「都市同盟によって強化された」（六〇頁）とする。それに対し独語訳最新版では、都市同盟とハンザに直接的なつながりがあったわけではない点に触れ、その上で都市同盟の重要性は、地域的・超地域的な協働によって商人の利害を代表したことに求められるとする。

それでは、ハンザはいつ、どのような契機で形成から完成へと至ったのであろうか。本書では、一四世紀後半にフランスとの経済紛争やデンマークとの戦争を経て、「長

い間構想していた新しい組織へとハンザは変貌した。すなわちドイツ商人の共同体から、より正確には重なり合いながら、ハンザ都市の団体へと姿を変えたのである」（七四頁、傍点評者）。一方で独語訳最新版では、商館制度の整備を中心としてハンザ全体の組織化が進み、みずから「ドイツ・ハンザ *die deutsche hanse*」と意識するようになったところに、ハンザという団体組織の完成を見ている。ハンザⅡ都市連合という見方から距離を置く姿勢が、ここからも明らかであろう。

以上は、ハンザの本質をどのようなところに見出すかという、いわば歴史認識の問題である。しかし、このような見方の変化というだけでは済まない「古さ」も本書には見受けられる。たとえば第Ⅱ部第四章第二節「商人という職業—個人企業と商事会社」において、ハンザ商人の事業形態は、個人企業（ドイツ語で *Eigenhandel*）と商事会社（*Gesellschaftshandel*）のふたつであるとされるが（一七八頁）、現在では委託業（*Kommissionsgeschäft*）を加えた三つとみなされている。また原著では「ゼンデーヴェ *sendevē*」と呼ばれる委託を個人企業の範疇に入れている。しかしその後の研究の進展により、「ゼンデーヴェ」は商事会社の枠組みで行われるパートナーシップの中でなされる「追加出資」を指すものであることが

明らかにされており (A. Cordes, *Spätmittelalterlicher Gesellschaftshandel im Hanseraum*, Köln et al. 1998)、「ゼンブーヴェ商品」を扱う業務はそれ自身が「委託業」であったとみなされている。

ハンザの商人の信用取引をめぐっては、本書とまったく異なる見解が現在の通説となっている。本書によれば、「信用に対する不信」(二一六頁)と「敵意」(二一七頁)がハンザの特徴であった。ハンザは全体政策として信用取引の禁止を求めたことがあったからである。その理由として、「価格が不安定となり、その結果として取引が混乱をきたす」、つまり「購入者が負債の決済に必要となる資金を入手するために損を覚悟で売り捌いたり、あるいはその場で決済する必要がないので必要以上に高い額を支払った」とし、「危険な商業活動への誘惑をいや増し、さらには良心の乏しい商人による不実な行為を助長すること、ハンザ商人の名声を貶める」ような事態を嫌忌したことが挙げられる(二一七―二一八頁)。今日では、信用取引禁止政策の発令は当該時期の政治外交上・経済上の特殊事情に起因するもので、「ハンザの信用嫌い」として一般化することはできず、ハンザの商人による信用取引は一般的なものであったと考えられている (S. Jenks, “War die Hanse kreditendlich?” in *Vierteljahrschrift für Sozial- und*

Wirtschaftsgeschichte, 69 (1982), S. 305-337)。とくにイタリアに比べて信用が発達していなかったことは事実である。しかしその理由は「信用嫌い」ではなく、商人の事業形態の特徴のためであったと考えられている。すなわち、ハンザの商人は、小規模でより少ない資金で済む短期的パートナーシップを好んでいたため、信用取引がさほど必要とされていなかった。両者の違いは、商業構造の差異によるものなのである。

上記の諸事項は、研究の進展によって克服されたもののうちの代表的な部分にすぎない。本書の記述の一部が「時代遅れ」であることは否めないのである。しかし、別の見方をすれば、何十年という歳月を経てもこの程度の修正しか受けていないことは驚嘆に値する。また私見では、本書は学問的正確さでは古びたところがあるにせよ、それでも現在の読者の心をとらえるハンザの歴史像を提供している。むしろ独語訳の内容改訂では、それがいくぶん失われているように感じられる。たとえば、上述のように「商人ハンザから都市ハンザへ」という第1部のタイトルを放棄し、「初期段階」に変えたことは、学問的には正確な時代区分であろうが、著者の分かりやすくダイナミックな歴史観が消え、何か素っ気ない印象を与える。「ドランジェ」の魅力は今なお生きており、原著に忠実な本書の意義は大

きいことを強調したい。

とはいえ、本書の底本が客観的に言って「古い」のは事実である。そうであるからには、本書でこのことを正面から受けとめ、「訳者解説」のような箇所を設けて今日の研究水準に照らした「ドランジエ」の位置づけについて具体的な論及がされていないのは、難点であると評せざるを得ない。たしかに巻末で最新の研究が紹介されており、それ自体非常に貴重な案内である。しかし、単に新しい研究成果を列挙するだけではなく、研究史上いかなる問題がどのように議論され、乗り越えられ、新たな歴史像が構築されたのか、手短にでも主だった項目を紙幅の許す限りにおいて論じるべきであったように思われる。

訳書として本書を通読して感じたのは、その完成度の高さである。訳文は読みやすく、七人という多くの訳者が携わったにもかかわらず訳語・文体の統一がとれている。翻訳・監訳作業には大変な労力がかけられたと察せられる。敬意を表したい。最後に、事実関係に関する事柄を二点のみ指摘したい。「他のヴェント都市であるダンツイヒ」（一三八頁）は「その他のヴェント都市やダンツイヒ」である。商人フェッキンフーゼンの「二一冊」の会計簿（一八六頁）は「二二冊」ではないか。

（本学経済学部准教授）